

1 題材名 気もちがかたちになるとき**2 授業構成****(1) 教師と教材**

本題材は、新学習指導要領の次の内容に位置づけられている。

- B鑑賞 (1) ア 自分たちの作品や身近な美術作品や製作の過程などを鑑賞して、よさや面白さを感じ取ること。
- イ 感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、いろいろな表し方や材料による感じの違いなどが分かること。

本題材のねらいは、子どもたちのものの見方をさらに広げることである。これまでに取り組んできた鑑賞の学習で扱った美術作品は、絵画や彫刻というようなある一定の伝統的芸術分野に分類できるものであった。現代美術においてその多くは、伝統的な枠に入らない表現があり、作者の社会に対する思い等、人々の心に強く訴えかけようとする作品もある。それゆえに小学生の発達段階を考えたとき、学習の中で鑑賞させることは難しいと思われる観がある。しかし、伝統的な美術だけでなく、同時代に生きる人々に発信されている作品として、子どもたちが鑑賞する価値があるのではないかと考えている。今を生きる子どもたちに、今ある美術を鑑賞させたい。

本時で鑑賞する作品は、現代美術作家塩田千春の「DNA からの対話」である。この作品は、放射状に並べられた2000足を超える靴がそれぞれ赤い糸で結ばれ、1つに束ねられている。靴は全国各地から一般応募によって集められ、それぞれに手紙が添えられている。手紙には、送り主の靴にまつわるエピソードが記されている。赤い糸から何かの結びつきやつながり、手紙に込めた靴の持ち主の気もちと、それを読む鑑賞者の心の動きが、子どもたちにとってはイメージしやすいと思われる。そして、美術作品が作者の気もちの表れというだけでなく、作品へのかかわり方を問わず、それぞれの立場になって作品と向き合うことができるのではないかと考えている。

この作品は、作家が自分1人で長い時間かけてつくり上げた作品ではなく、作家のアイデアに賛同した多くの人々の力も加わった上で1つの作品として完成されたこと、そして、修練された加工技術に支えられた作品でもないことから、表現技術に基づく鑑賞のアプローチもほとんど意味を成さない。子どもたちがこれまで鑑賞の学習で出会ってきた美術作品の概念とは大きく異なる作品であり、子どもが知っている美術に対する常識を越えた作品であると言える。それゆえに本題材の鑑賞は、子どもたちにとって「何だろう」「何を表しているのかな」といった疑問をもちながら作品を見るという体験になるであろう。たくさんの疑問をもちながらも、作品のもつ意味や制作の手法を探り、それに込められた作者の意図や思いに迫ることで、美術に対する幅広い認識と多角的なものの見方、多様に表現する力が育てられると考え、本題材を設定した。一般的に現代美術の作品には、表現メディアが限定されず、奇抜なものや社会に対するメッセージ性が強い等、作者の個性と感性が存分に表れた作品が多いと言える。これは、斬新である一方ですでに価値づけられた伝統的美術になじんだ目には、奇異で難解なものとして受け止められてしまいがちである。しかし、わからないものとして受け流してしまうのではなく、新たな美術体験の中にもその本質を探り続けていこうとする行為もまた、美術を鑑賞する態度であることにも気づかせていきたい。

(2) 子どもと教師

子どもたちは2年生時から美術作品の鑑賞の学習を重ねてきている。美術作品を見ることの楽しさや自分とは異なった友だちの見方に気づくことのおもしろさを感じるとともに、作品から学んだ表現を自分の表現にいかそうとする態度も見られる。今までの学習では、ピカソ、モネ、ゴッホ、長谷川等伯、左甚五郎、ヘンリー・ムーア、ジャコメッティ等、優れた美術品として多くの人が賞賛している作品を鑑賞してきた。そして、それらの作品に表現された線や色、かたち等の造形要素が伝える作者の意図や思いを探ることを通して、多様なものの見方や感じ方を発見してきた。子どもたちは、素直に自分の見つけたことや感じたことを言葉で根拠を明らかにしながら伝え合い、友だちの見方に

驚いたり、友だちの考えをもとに自分の考えをさらに深めたりしている。多角的に対象を見たり、他の鑑賞の学習で見つけた造形要素と関連づけたりする等、鑑賞する力は確実に育ちつつある。

学習する中で、子どもたちは、美術作品は「美しい」「巧みな表現技術」「他にはない技法」等で表現された作品であり「触れることのできないもの」といった、美術作品に対する概念をすでにもっていることがわかった。そこで、本題材では、現代美術の作品鑑賞を通して、表現の豊かさやその表現形態の意外性に気づくことで、ものの見方や感じ方がさらに多様になるようにしたいと考えた。本題材における直感的な美術鑑賞は、子どもたちにとっても新たな領域の挑戦となる。

(3) 子どもと教材

本時の学習は、現代美術の作品から伝統的な美術とは異なる見方を子どもたちが見つけていく学習である。まず自分たちが抱えている美術作品に対する概念を確認し、これまでの学習で学んできた作品の見方では、解釈しきれない作品があることに気づくことから始める。そして、作品「DNA からの対話」を提示し、見たままの感想や疑問等を伝え合う。美術鑑賞の意義は、時を経てすでに歴史的に価値づけられた作品に触れることのみならず、たとえ未整理で多くの疑問に向き合ったとしても、同時代の生成される感性とのかかわりをもつことを排除して考えることはできないはずである。子どもたちが作品から感じた疑問や不可思議なことについて話し合うことで、作者がどんな制作過程を経て、何をしようとしたのか等作品の本質に迫りたい。ここでは、作品の解釈について結論づけるのではなく、これまで見てきた作品との相違点等を感じながら、子どもたちの見方や感じ方で本作品の特徴や意図を捉えさせたいと考えている。子どもたち自身が学習前の美術に対する捉えと学習後の捉えの変化に気づくことができるよう、既習の鑑賞の学習と本時で感じたことや考えたことを比較しながら子どもたちの発言をつないでいきたい。

学習のまとめとして、「DNA からの対話」と同じように、たくさんの人々がかかわることによって完成される作品、光や音等で異空間を体感できるような作品、直接触れ遊ぶことでかたちや感触のおもしろさを味わえるような作品を紹介することで、人と人、人とのものとのつながりによって完成される作品や鑑賞する前と後で、鑑賞者の心の動きを生じさせることも美術作品の1つであることを伝える。そして、それはすでに造形遊びという学習で、自分たちも体験していることに触れ、現代美術がより身近に存在していることに気づかせたい。

3 題材の目標

現代美術作品の鑑賞を通して、新たな美術への認識を広げるとともに、多様なものの見方や感じ方ができる。

4 学習計画（全1時間）

塩田千春「DNA からの対話」を鑑賞し、制作のしかたや作品に込めた作者の意図や思いを探る。

5 本時の学習について

(1) 本時の目標

「DNA からの対話」ができるまでの過程や作者の意図や思いを探ることで、いろいろな表現のしかたがあることに気づく。

(2) 期待される児童の様相

- A 自分の感じたことや考えたことを、作者の意図や気持ちに迫りながら伝えている。
- B 自分の感じたことや考えたことを、根拠を明らかにしながら伝えている。
- C 友だちの感じことや考えたことをヒントにしながら、自分の感想を伝えようとしている。

(3) 本時の展開（○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個への支援）

学 習 活 動	教師の支援・意図
1 これまで学習してきた美術作品について振り返る。 ・古い。 ・絵や彫刻のこと。 ・きれいなもの。 ・とても上手。 ・筆づかいや色づかいに工夫がしてある。	○美術作品とはどんなもののかを言うのか問うことで、自分がもっている美術に対する概念に気づかせる。 ◇今までの学習で鑑賞した作品を想起させることで自分の美術作品への捉えを振り返らせたい。 ◆好きな作品を想起させることで、美術についてイメージさせる。

・いろいろな色やかたちがあるよ。 ・写真みたい。 ・意味がわからない不思議な作品。 ・作者の気持ち、メッセージがある。 2 作品「DNAからの対話」を見て、気づいたことを伝え合う。	○子どもたちの概念をまとめることで、これまで見てきた作品は作者が何を表そうとしているのか自分なりの解釈や価値づけがしやすい作品であることを感じとらせたい。 ○これまでの学習で線や色、かたち等の造形要素から作者が伝えようとした気持ちがわかったことを確認する。
この作品にはどんな気持ちがかくれているのかな	
・怖い。 ・真っ赤っかだ。 ・靴は何足あるのかな。 ・どうやって集めたのかな。 ・赤い糸が血管みたい。 ・糸でつながれているみたい。 ・どうして靴なのかな ・1人ではつくれないくらい大きいよ。 ・きっとたくさんの人の協力で作ったんだよ。 ・塩田さんの考えに賛成したから協力したんだよ。 ・赤い糸だから人と人とがつながっているって言いたいんじゃないかな。 ・靴を大切にしていた気持ちがあるよ。 ・塩田さんは、人の気持ちをつないでいるのかもしれないよ。 ・何か作者のメッセージがあるはずだよ。	○見たままの感想や作品から見つけたことを発言させるとともに、「何だろう」「どうして」という疑問も出させたい。 ○今までの見てきた作品と異なる感じや制作方法にも工夫がありそうなことに気づかせたい。 ○伝統的な美術との違いだけでなく、共通点についても考えさせたい。 ○制作の方法や履き古された靴であること、靴に添えられた手紙があることを紹介する。 ○作者は何も描いていない、つくっていないのに多くの人々が美術作品として惹きつけられるのはなぜか考えさせたい。 ○疑問について話し合うことで、作者の伝えようとしたこと、しようとしたことを想像させたい。 ◇作品名を紹介し、想像をふくらませるヒントとする。 ○赤い糸で結ばれていることに着目し、「何と」「誰と」結ばれているか考えさせることで、人と人とのつながりについて気づかせたい。 ◆靴に添えられた手紙の内容を伝え、それを読む鑑賞者の気持ちを想像させることで、自分の考えがもてるようにする。 ○何も言わない「靴」と「ひも」について考えることで、いろいろな思いが出てきたことを振り返り、この作品は制作に携わった人々だけでなく、作品を鑑賞する人にもいろいろな思いを抱かせる作品であり、これも美術の1つであることを知らせる。 ○たくさんの人々がかかわることによって完成した作品、光や音等で異空間を体感できるような作品等を紹介することで、人と人、人とのつながりによって完成される作品も美術作品であることを伝える。 ○造形遊びを想起させることで、自分たちも現代美術の考え方に似たような造形活動をすでに体験していることにも触れたい。 ○ワークシートに、学習して新たに考えたことや感じたことを書かせる。
3 他の作家の作品を見る。 4 学習のまとめをする。	

